

西国街道

ものがたり

「大名が下る時は、昔からの習慣で、草津で必ず「昼の食事」をし、また、時には「休けい」をした。その時は、休む家の門前の左右に「番」を立て、「水」を出した。小休みする家の亭主と村の庄屋は袴（かみしも）をつけ、与頭（くみがしら）は袴（はかま）をつけて、町の端まで迎え送りをし、そのほか、村役人などが、村境から道の先導をした。長崎奉行が通行する時は、道の先導や掃除など村人が大勢出て働いた…。」

右の文は「国郡志御用下しらべ書出帖」草津村・文政2年（1819）から抜き書きして、分かりやすい文にしたものです。草津は西国街道の間駅（休泊施設）として役割をはたしていました。大名や藩の役人などが通るときにおける街道近くの村人達の様子が、少しはうかがえるのではないのでしょうか。

西国街道は近世の山陽道のこと、幕府の五街道（東海道・中山道・日光道・奥州道・甲州道）からはずれますが、西国諸大名の参勤交代や長崎奉行、幕府代官等が往来する道として、五街道に次ぐ重要な位置を占めていました。

広島藩の交通制度が二番整えられたのは、寛永10年（1633）に幕府の巡見使を迎えるためでした。この時、藩は御茶屋作事・道橋・里塚の各奉行を任命して、藩内の道路や施設の整備に力を尽したといわれます。御茶屋は幕府巡見が行われた時、宿泊施設のない村などに藩が設置したもので、道には約4kmごとに目印の塚をつくり、松・杉・榎などを植えました。これを「里塚」といいます。

天保6年（1835）には、50回を数える大名達の往来と、それに要した人馬の記録が残っています。



旅は道づれ、世は情け。

江戸時代の庶民の旅は「お伊勢参り」「京（本願寺）参り」などの寺社まわりが主でしたが、取り締まりが厳重であつたため、関所を通るには「関所手形」と身分証明書となる「往来手形」が必要でした。「関所手形」は庄屋が、「往来手形」は、その旅人の檀那寺（だんなでら）などが発行していました。宿は食事を出してくれる「旅籠（はたご）」、食事を作る薪代を払う「木賃宿」がありました。文政頃の宿泊代は旅籠で2食付き150文（2250円）〜200文（3000円）、木賃宿で35文（525円）〜50文（750円）、そこで買う米は2食分で90文（1350円）〜120文（1800円）ぐらいでした。

右の数字は単純に現在の米価の換算から計算したもので、実際には労働賃金が高くなっているため、もう少し高くなります。



古絵図・井口周辺



波打ちぎわの正順寺が描かれている。波に洗われた跡のある石垣は現在も見られる。正順寺の上の山は頼山陽らが月見をした望月山。引き潮の時は干潟を通行していた。

古絵図・草津周辺



古江には「四軒茶屋」が描かれ、草津城は四つの丘からできていて、西国街道は城跡の中を通過している。遠浅のため、草津港は村の西側にあったことが想像できる。

広島藩の絵師岡岷山の「都志見往来日記」の諸勝図

寛政九年（1797）の作 広島市立中央図書館所蔵